



Title	赤獅童議論：米國遠東學會中國思想委員會の第三回 討論會に出席して
Author(s)	宮川, 尙志
Citation	懷徳. 1958, 29, p. 67-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

赤獅堂議論

——米國遠東學會中國思想委員會の第三回討論會に出席して——

宮 川 尙 志

木曜日（一九五七年九月五日）の正午前に、ニューヨークセントラル鐵道でボストンを立つて、季節が少し早いかれど、ところどころ紅葉したかえでが沿線の緑一色の單調を破つてくれるマサチューセツ州を東から西に横切り、三時すぎにピッツフィールドという小さな町に着いた。わたしはその年の二月いらい加州のスタンフォード大學に滞在中であつて、渡米の目的である「實踐における儒教」の共同研究に参加してはや半年近く経過していた。この共同研究は「The Journal of Asian Studies（舊稱 The Far Eastern Quarterly）」の發行で知られている米國遠東學會（The Association for Asian Studies）の常設委員會である中國思想委員會によつて成されつつあるもので、ハーバード大學のフエバンク教授、スタンフォード大學のアーサー・ライト教授のきもいりで年一回、研究参加者があらかじめ呈出した分擔課題についての草案的報告を相互に検討・批判して將來の定稿にする

のために、靜かで涼しい所に集つて數日間にわたる會合を開くことになつてゐる。つまりわたしの一年の在外研究にとつてその頂點をなすものであり、來會者の數は限られてゐるが、一の報告に對する議論に午前または夕食後の三時間餘をあてるといふ集約的な仕方において、米國學者の考え方にふれるといふ點でも、えがたい機會である。

開催地のストックブリッジはピッツフィールドから車で十五分位南にある。古いインディアンの村で一八世紀前半に宣教師がのりこみ、彼らはキリスト教に歸依し、獨立戰爭にも参加して、インディアン諸族中、最初に市民權を得たという。海拔二五〇米で避暑地として知られ、二千の人口が夏期には倍になる。

全米各大學から集つた十數名の東洋學者はレッド・ライオン・インという由緒ある旅館に一週間宿泊して毎日二回の討論會に参加するわけである。

驛にほど近い地方バスの切符賣場できいてみるとストックブリッジ行のバスは午後六時ごろになる。タクシーもないことはないが、だれか車で來ているはずだと思ひ旅館に電話をかけて、迎えにきてくれと頼んだ。出てきたのはコロンビア大學で一週間ほど前にあつたデ・ベリー教授で、何かしら自分は行けないが他の人に頼むという口振であつた。じつはわたしは八月七日にスタンフォードを出發して、一個月にわたり、ロスアンゼルス・グランドキャニオン・サンタフェ・エルパソ・ニューオーレアンズ・アトランタ・ワシントン・フィラデルフィア・ニューヨークなどを廻つてきたのである。會議では各自が題目について口頭發表をすることなく、すでにタイプライターで印刷して來會者に配つてあるものをみな讀んでいるという期待の上に、始めから討論に入るわけである。ところがわたしはそのプリントが配られるころ旅行中なのでデ・ベリー氏が預つていつてくれた。まだみな通讀してないし、第一デ・ベリー氏は自分のをまだ書き上げ中であつた。氏の題目は日本と中國における新儒教（宋學）の受け入れ方に關する比較論であつた。會期中、午後は自由時間だつたのだが、氏はそれから三日ほどかかつて文字通り寢食を忘れて責を果した。散歩にもカクテルパーティーにも誘われても出なかつた。論文の

期日がおくれがちなのは日米兩國とも變りはないが、なかなかきつちりしたものだと思ひした。

三十分ほど待つとライト氏がモウト氏の車に乗つて迎えにきてくれた。モウト氏はプリンスストン大學教授で、「元朝知識人の生活における隱逸主義」と題する百六十枚に上る大報告を出されておられ、これを讀むには一同苦勞したようである。わたしは日本での慣習を考へて、はじめに要旨をわたしにおいて會議で正式發表、質疑應答、そのあとで雜誌に發表するという順だと思つて、

「漢民族の南進と儒教の南方住民教化」という題で三十餘枚のものを出しておいたが、みなのと比べると、ハーバード大學のシュオルツ教授の問題提起的な論文について短かい方だつた。米國學者はタイプライターで自分の草稿を自分で打つか秘書に打たせて、いく人かの學友に見せ批評を乞ひ、また書き直して小さい會で發表し、また修正するというやりかたらしい。これは表音文字による國語の利點で、論文中原音を記すべき難かしい漢字もみなローマ字化して理解でき（それだから現代中國音を知らない東洋史家が固有名詞の比定に困惑するという事態がおこる）念のため漢字を文末に書き記すことで間にあう。日本語の草稿を謄寫版にしてもよいわけだが、日本における研究費の少額、研究機構の不整という壁にぶ



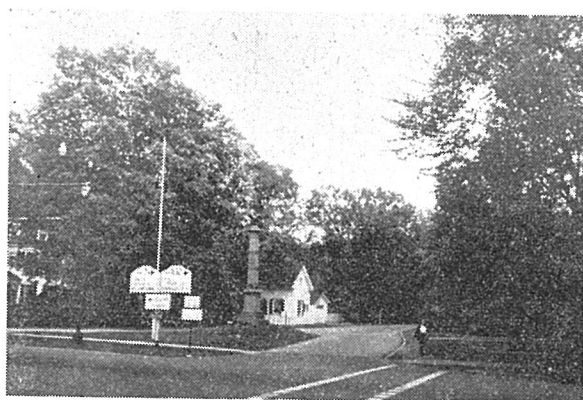
の論文の中には、粗雑に書きおろしたような感じを與えるものもある。」と言われたことを思いだす。

自動車の中で語りながらモウト氏が一九五四年ごろ京都大學に留學して二三度話したことのあるのを思いだした。氏は南京で學んだことがあり、中國人である陳效蘭女士と知りあい、結婚して、この會にも二人で來ていら

つかるわけで、ある論文の定稿となる以前の段階で學友との検討による改善は主に口頭發表によらざるを得ない。ずつとまゑある米人學者から「われわれは論文にする前に何度も書き直し小さい點まで誤りや不統一のないように氣をつけるのに、日本の

車はやがてストックブリッジの本通りにきて左手の白くぬつた大きな建物の前に停つた。赤獅子という名前だがホワイトライオン・インと改名した方がよい。歐米には動物の名に色の形容詞をつけた旅館や酒場が多いそうである。圖書館・郵便局・博物館・教會などこの旅館の附近に並んでおり、五六百メートルはなれて汽車の驛もある。予約

してあつた二階の廣い室におちついた。やがて、ライト氏の室ですでに集つていた學者たちに會いカクテルを飲んで雑談した。じつは第一回會合はこの日の午前中に行われていたので、ライト氏から一九五一年以來の本委員會の活動、



特に研究成果である既刊の二冊の書物 *Studies in Chinese Thought* (シカン・一九五三) および *Thought and Institutions in China* (シカフ・一九五七當時は未刊) について、特に社會學者であり特に参加したサタン氏に説明した。また會期中の討論の要旨はスタンフォード大學の中國語講師の許芥昱氏が筆記の勞をとり、特に各研究課題の相互關連、計畫の將來における展開に關する意見、各自が草稿改訂に必要な諸點について記述すべきことがきめられた。

階下の食堂で一同そろつて夕食をした。この旅館はもとビンガムズ未亡人酒店と呼ばれ四代にわたり同家族が經營している。いまは新裝成り、壁や廊下にアメリカとしては古物に扱われる陶器類を陳列している。この料理は評判であるらしく、近郊から食事のためにだけ車をとばせてくる客も多いらしい。メニューを見て別の紙に好きな品名を書いて給仕にわたす。ビフテキ九ドルとあるのを驚きながら見ていると、となりのライト氏が「これ以外は何を選んでも結構」ときた。外のも大抵三―五ドルである。この會合のための往復旅費、宿料、食費はみな會から支拂われる。ライト氏とサタン氏らが最も雄辯で話は學問のことから米國政治の問題に入つてゆく。こうなると口をはさむだけの予備知識がない。

翌六日の午前はいよいよ各報告についての討論である。シェオルツ氏の「儒教についての諸問題」が組上りのぼる。出席者十二名、紅二點はピッツバーグ大學の劉子健氏の夫人王惠箴博士とモウト夫人である。王博士は報告も提出しているが陳女士は傍聴者である。シェオルツ氏の提言はこうである。儒教思想には持久的にくりかえし現われる基本的極性 (polarity) があり、ある時代のある思想家の觀念・行爲は單にその時代の關心傾向からのみでは了解されぬもので、儒教の始源の教説を再把握しようとする努力が存する。例えば修身と治國平天下という二目的は理想的には君子にあつては兩立するわけだが、實際は孔子さえも教師として限られた範圍で自己實現を計るのに満足した。内と外、知と行のごときもかかる一對の極性である。これらの極性はその間に緊張、兩立不能の要因をもつた一對の相關概念であり、これかあれかの選擇、二分釋 (dichotomy) ではないと説明された。

討論において、氏の試論が有益であると認められ、その他に體と用、天下と國、頓と漸などという極性が指摘された。こうした諸極性を一括して、權威的と自由的と言えないかという發言もあつたが、西洋の概念ではめきれないという議論もあつた。わたしは極性という語か

ら考えられるほどの強い緊張は中國思想史では見られず、一方へ重心が傾いても他方を捨てないという、「あれでもこれでも」の面を見ることができまいかというような意見を、あまり自信なしに言つた。これらの討論會には議長があつて參會者が交代にする。許君が筆記するが、各人も紙と鉛筆を用意して覺書をとる。聞いていると實によく次から次へと質問がつづく。議長は言葉は少いが必要な時はうまくかじをとる。だまつている人はなく、一人でしゃべりまくることもない。多くの人々はすでに一九五二年のコロラド州アスペン、五四年のニューハンブシヤ州ラコニアにおける同種の會合に出席し、お互によく知り合つてゐるせいもあるが、隔意なく活潑に意見を交換しあう。さすが小さい時から公衆の前での談話の練習を積んだ人々だと思ふ。日本人がもし語學がへただというなら、それは狹義の語學の才能の問題ではなく、自由に話す機會が少くて、その場の空氣をとつさにかむ力の足らぬためであらう。

正午に討論が終つた。午後の自由時間に一同は旅館から二十分位歩いて、この地の名門、故チヨウト氏の邸宅を訪うた。氏は米國の駐英大使をした人で、いまその遺族が住んでゐる。中國風の宏壯な庭園があつて、眺めがよくて、遠く文豪ホーソーンゆかりのタングルウッドが

望まれる。チヨウト夫人は快くわれわれを請じ入れ、紀念冊に署名を請われた。劉氏夫人がまず、「赤獅堂議論」つまりレッドライオン・インでの學會のために集つたということを記して、次々に名を書いた。チヨウト邸へゆく道には緑の樹々しげり野原に名も知らぬ草花が咲きみだれ、東部の秋色はわたしの旅情を慰めた。



右から Prof. Levenson, Mrs. Mote (陳敦蘭)
Mrs. Liu (王惠箴), Dr. Hsu (許芥昱), Prof.
Mote,

夕食後はカリホルニア大學（バークレー）のレヴンソン教授の「痕迹の示唆するもの。最後段階の儒教と君主政」が討論された。袁世凱の帝政運動を取り扱い、革命・君臣・封建といった関連問題にふれたもので、日本語の國體と中國語のそれや、廣くいえば中國の官僚體制と日本の徳川封建制のちがいは、明治以後における日本の君主制の強化確立に對して袁においては滑稽な模倣に終つたことで見られるように日本は君主制によつて近代化したのが中國君主制は近代化と兩立しなかつたことを論ずる。袁が利用しようとした儒教はもはや人倫普遍の道でなく國教として政治的セメントの役をするものであつた。レヴンソン氏が儒教は帝制終了と共に過去の破片と化したというのに對し、宗族生活などでお存続したという反論あり、儒教・君主制・官僚制の相關についてエベルハルトや内藤湖南博士の説が參考された。

なお報告の中でレヴンソン氏は禪讓を英譯して「ゆづることと拒むこと」つまり新しい帝位につくべき者が儀禮上、辭退するという意味に解釋したのに對し、モウト氏から質問がでた。こうした基礎の解釋上の議論がなされたのはこの會合で珍らしいことであつた。

七日の朝は王惠箴博士の「中國の宗族規範の分析」で、夕がフレデリック・モウト氏の番であつた。

王博士のものは一九・二〇世紀を主とする百五十の族譜の調査に基き、近世族譜の原型を北宋に求め、宗族規範に對する宋學の影響、政府が宗族に對する兩面的態度、すなわち社會の安定性を與えるもの、社會の認めた價值を青年に教えこむ手段として保護することともに、それが強大になりすぎ、君主制と官僚制とに反對する封建主義を育てるようになることを警戒したことを論じた。

宗族規範の典據は經典や文公家禮であり、ときに佛・道の書に仰いでいる。その内容には受容された教説と實際の行爲の關係を考えさせるものあり、たとえば經典に說かれる絶對的な孝は規範においては親の無理解のばあいの緩和規定を設け、男女の界限についても宋學の主張より實際的になつてゐる。

討論においてはこうした規範が選良の傳統と民間の傳統とのかけ橋になつてゐること、宗族が中國においては西洋の教會やインドのカーストの役目をしたこと、また農業と學業が望ましい職業とされてゐると共に商工に従事する族人についても考慮されてゐることなどが指摘された。

王女士の報告はのちに述べる夫君劉氏やモウト氏のそれと同じく、漢文史料を讀みこなし史料上の充分な準備の上に書き下した論文ということが一讀して判明され

た。他の人ももちろん漢文を参照したのであるが、論文構成の中心は歐米の東洋學の傳統から汲みとつた諸見解を繼承・發展させたもので、東洋的なものに始めからある種の態度をきめているもののように思われる。一體、アメリカの東洋學は歐洲のそれを輸入し理解した第一期と、アメリカ的東洋學を樹立しようとした第二期と、日米戰爭後に本格的になつた、いま若い世代に屬する學者らで代表さるべき形成過程の第三期とがあるように見うけられる。

モウト氏の長篇はとくに斬新な見解が目立つわけではないが、米國學界としては前人未踏の領域を扱い、かつわが早稻田大學の根本誠教授の「專制社會における抵抗の精神」をこの問題を扱つたほとんど唯一の著述である」と稱述し、特に同書の紹介批評の一文を附した。根本氏の著書は社會科學的でなく哲學的資格をもち、全社會・全文明の中心に横わる問題を反映するものとして隱逸主義を見る。つまり隱逸は專制社會における權威主義の過剰に對する抵抗であり批判であるとし、宋末元初に多くでたモウト氏のいう「強いられた逸民」——元に出仕を欲しなかつた宋の遺臣——を全く取り上げず「自發的隱逸主義」のみを扱うとモウト氏は批評した。

自發的逸民とは家族關係や專制國家の壓力に反抗して

良心の命令に従ひ公生活から離れたものであるが、強いられた逸民とは、新儒教（宋學）の時代に重要な意味をもつてくるもので、國家に是認された行爲離型に順應する態度である。新儒教では專制政府に奉仕する規範である忠（忠經は唐末か宋の僞作である——）を、不自然なまでの性的禁制や親への絕對服従である孝と共に強調して、その權威主義的社會規範を構成した。宋の遺臣が元に仕えなかつたのは異民族の野蕃を嫌い、また彼らにより出世を妨げられたという事情の外に、宋學の説く忠の觀念が兩朝に仕えることを否認したことによる。なお逸民の譯語としてモウト氏は宗教的意味の強い hermit を用いず recluse を選んだ。

モウト氏は元代における漢人の學者文人の類型を五世代に分ち概觀し、とくに劉因をとりあげ、彼は自發的逸民の型に屬し、古典的儒教（漢唐訓詁學）と新儒教の兩要素の混合であり、道家的と見られているが、道家の非合理主義を認めなかつたと説いた。

氏の報告は日華の研究資料に着實に目を通してゐる點で本會合の白眉であつたが、これに對する討論は元という時代を離れ、隱逸という問題の範圍をこえ、新儒教の性格をめぐり、道學・理學・宋學の語の同異などに各人の議論が提出され、議論は分散的になるのを免れなかつ

た。しかし參會者の多くが宋學に深い關心を持つただけでなく、それぞれの立場と分野で研究をしていることが了解された。

その夜は劉氏の操縦する車で數人の仲間とバーリントンの夜店を見た。近在の農家が各種の野菜や家畜を出品し、また農業機械や各種の土産物、それにアリゾナの蛇とか南米のわになどの見世物もある。見料(？)五〇セントで人の身なりを見て職業を當てて、當らねば賞品をくれるという男が立つている。當否は同行者が立會になつて彼に知らせるのだが、モウト氏がやつて見ないかという。そこであててみるといつたらわたしを洗濯屋だといつた。粗末な革の紙入れをくれたが、これはその後ヨーロッパの各種通貨を入れるのに大いに役に立つた。日本の學者を洗濯屋に見立てたといつて後でみな大笑になつた。

八日は日曜日で、午前の會合だけであつた。スタンフォード大學の哲學科講師、デイヴィッド・ニヴィンソン氏の「因習に對する抗議と、抗議の因習」という題で、隱逸ほど決定的ではないが、科擧やこれに連る教育に對する儒教内部の異論の諸相を取り上げたものである。

氏はまず歐陽脩が韓愈の古文を推奨し、時文の流行を憎んだことをあげ、時文が國家試験制度に連ること、儒

教が好學や修養や自己判斷を尊んだのにも拘らず、孝子は科擧を受けて官職を得、親を養うべきだと教えたことにおいて、士大夫は自ら心中葛藤を感じたことを述べ、この抗議の流行が劉知幾から王陽明・章學誠から顧頤剛・胡適にも傳つていくという。そして國家の制度とからみあつた儒教に對する批判的思考・著作の中心として書院の存在に注意する。

氏の説はモウト氏のように宋學において國家權力に對する哲學的根據のある抵抗は減退しているという考えとくいちがうものあり、韓愈の古文運動は試験制とは關係なく、氏の歐陽脩の評価についても討論がなされた。しかし兩氏とも宋初における社會變化が傳統に對する抗議の背景をなしていることを認めており、わが内藤博士の時代區分説がいまや世界的に注目されていることをうらづけるものである。

わたしはこの日までには午後の自由時間の中に次の會合の議題になる報告の英文を讀破し、質問すべき要點を考へたりすることで、全部を費やしても足りない位であつた。モウト氏が済んで少し樂になり、ゴルフ場や博物館の方へ散歩して東部の秋色を改めて楽しんだ。

九日(月曜)の朝は劉子健氏の「中國官吏の傳統的分類」が上程され、夕はわたしの番であつた。劉氏は正史・

政書・類書に見える官吏の分類の稱呼（良臣・奸臣・循吏・酷吏等）に儒教に基づく行動的・作用的含意ありとし、官吏の行爲類型の内に各時代の儒教の異なる作用を見出そうとしたものである。氏は宋代において官僚組織が新しい複雑さに達し價値の變化が起つたとして、この時代を中心にして、古くは經典に見える君子・小人の二分釋をもつて基本的分類と考え、帝國の諸時代になつて、一方では儒教道德に基く規準、他方では行政手腕による基準を兩極として様々な名稱ができたという。そして後者は國家の機能的要求をみたすためのものであり、基本的には非儒教的な國家機構と、儒教が國家に形相を與えようとした努力との間の緊張を示すものとした。

氏の取上げた問題は一應興味あるものとはいへ、氏の分析した限りにおける官吏類型の内容や相互關係から、ただちにその時代のまた全歴史を通ずる儒教政治の具體的なあり方を照しだすことは難かしく、何か名目にとらわれた研究ではあるまいかという懸念もした。

九日（月曜）の夕方はわたしの提出した「漢民族の南進と儒教の南方住民教化」について討論した。わたしは漢民族が北方民族に對しては概して守勢に立ちしばしば彼らに征服されたのに反し、南方民族に對しては漸進的にこれを征服同化し、漢民族じんの生活圏もした

いに南方に進んでいつた長い歴史の過程において、儒教が南方民族の漢化についてどんな役割を果たしたかということ、後漢代の南方に赴任した地方官の學校設立、巫風の禁絶、婚喪の禮俗改良などの面から考察し、儒教の閑却された一面、つまり中國民族の社會規範を、なしうれば他民族にも及ぼそうとする宗教的感化という面を考察した。

討論においては司會者シュオルツ氏の批評的導言につられて、漢族の「われら意識」とか「文化主義と種族主義とどちらがその他民族に對するとき優勢に現われるか」について議論が集中され、わたしの最も力點をおこうとした儒教の宗教性の説明については默認されたかたちに終つた。

十日（火曜日）の午前はライト氏「隋煬帝―その人物・帝王かつ惡人」の番であつた。氏は一九五四―五五年の京都滞在中、隋代文化史の徹底的研究に没頭したが、その期間に成された充分な史料上の準備と人間行動に關する諸科學の知識の上に立ち、六朝史の終幕に出現するこの特異な人物を、その事實のままの人物、中國史家の歴史敘述により、王朝最後の悪い君主として定型化された人物像、および唐代以後の民間小説に記される暴君好色漢としての人物像という三方面から考察した。第二の

考察において、彼以前にできていた暴君の定型を商王紂をもつて代表させ、(1)政治的至上權力の濫用(忠良の臣下を冷遇し、佞臣を重用し民衆の苦を無視する)(2)權力と富とを自己満足のため無制限に用いる(飲酒、奇巧の品を好み、奢侈的土木工事をし、政務に怠慢)(3)放恣(性的放縱、宴會にふけり淫樂を愛する)(4)個人道德の缺除(不孝、不弟、姦淫、天を敬せず、魔法にふける)の四條に整理した。

そしてこの暴君の定型は隋の文帝が陳の後主の二十罪を數えた詔勅——それは三十萬部寫して江南に散布された——にも現われている。また唐の史家は右の四條中、(1)と(2)に重點をおき、(3)と(4)は輕視した。また民間文學では(1)が詳細に修飾されているが、話の内容は(2)と(3)とであり、(4)について興味を示していない。

こうして煬帝の三の人物像の關連について、民間文學特に傳奇のそれが道德的歴史家のそれとどう關係したのか、後者をただ模倣したのか、逆に後者の影響を受けたのかというような、士大夫文化と庶民文化の關連という廣い問題にもふれてくるであらう。ここでも宋學の清教徒的、權威主義的思想が、唐宋の傳奇から十七世紀の隋唐演義に至る煬帝の人間像の變化にどう關係したかということが提出される。氏の論文については中國の歴史敍

述の性格や王朝史の構成に關していろいろ發言がなされた。

最後にデ・ベリー氏の「新儒教の效用」という序説的論文の討論では冒頭のシュオルツ氏のそれと照應する方法論上の議論をひきおこした。

氏は日華兩國の儒教を比較して、明治期の民族主義における儒教の意義が大であるのに、中國では近代化をはばめたという差異の原因を探るためには、儒教の本質は何か、兩國の文化發展を異らしめた要因は何かということとをさらに深く理解せねばならないという。

さてデ・ベリー氏は日華兩國とも國家が儒教思想を統制した面は限られており、正統官學以外の儒教系諸思想が寛容されたことを例證し、儒教は自身のもつ知的運動力で發展する餘地があつた。新儒教には原教旨主義(thin-*gnosticism*)・復古主義・人間主義・合理主義・歴史的精神の五の特長があるが第一のもの、即ち儒教の本源の敎説の價值を再主張することが最も重要で、原敎説に自らが開始した知的諸傾向を和解させる必要から古い解釋と新しい挑戰的意見の辯證的相互交渉が諸時代に存した。日本では儒教は神道と連合し、西歐の挑戰に適應したが(會澤正志齋)、中國では阮元の例に見るごとく清の儒學が佛學の固陋に勝つことに満足していた。その

他、日華儒教の比較について興味ある指摘を行つた。

デ・ベリー氏の用語についてサタン氏らから概念規定上の意見があつたが、特に關心を集めたのは、本日になつて出席したジョン・フエアバンク氏が、日本で儒教が神道と連合して活氣をえたのなら、共產主義と連合してどうなるかということであつた。これに對しデ・ベリー氏はマルクシズムが儒教の人間主義を眞に受け入れたらその運動力を失うであらうといつた。また近代社會の工業化が儒教の復興を、從來のような形では不可能にするだろうとの意見が強かつた。

十一日（水曜）は十一回目の會合であつたが、すでに各人の報告についての討論は昨日で完了していたので、社會學者フランシス・サタン氏がこれまで出席傍聴してゐた感想をまとめて述べた。氏はまず、近年の傾向は思想が文化ときりはなして研究されうやうになつてゐるが、本會議の報告はあるものは思想問題を、他のものは思想と生活の關係を取り上げてゐるとした。思想史の研究法はいろいろあるが、中國思想研究にとり有效なのは象徴的表現に注意することで、グラネ・デュルケームの方法を一層推進したらよい。中國思想をそれじんの極性について解釋するという立場にも共鳴できるが、中國思想を西洋の術語で記述することにより東西の心性の間

隙をせばめられよう。社會學その他の學問の方法を中國思想の研究にもちこむべきでなく、思想の全體は價値の組合せではない。また大傳統（選良の傳統）と小傳統（民間のそれ）の重合はもつと研究さるべきである。サタン氏につづいて、フエアバンク氏は天命觀など正統觀念の研究が重要だと述べた。

十一日午後、十二回目の會合では將來の計畫について各人の發言あり、新たに参加を乞うべき學者とその専門分野の紹介、とくに日本の研究が今回では少かつたので、日本農村社會における儒教の作用について、有賀喜左衛門氏に協力を依頼すること、またこの會合の出版計畫について説明や意見の開陳があつた。

最後にデ・ベリー氏が、とくにわたしに向つて、この會合についての感想はないかと求められた。わたしは日本ではこういう種類の會合、つまり充分な費用のうらづけをもつて、定まつた數の研究者が、長い時間をかけて、かなり専門にわたり、かつ相互に關連深い問題について討論しあうような好機は少くともわたしの經驗としてはなく、大變結構でうらやましく思うと述べた。

サタン氏も同様に感想を求められたが、前回に述べた意見で歴史家側から反對のあつたこと、即ち社會學的方法で史料を處理することに對して氏の否定的な見解を述

べられた。また氏にわたしが個人的にきいた時も、アメリカで歴史家と社會學者の協同はあまり行われていないというような答であつた。しかし氏のいう社會學は狹義のもので、社會科學一般ではなくかつ氏の否定したのは現に歴史家が使用している社會學的方法への批判であるようにうけとれた。どこの國でも似た様な水掛論があると思つた。

十二日午前に最後の打合せをすませて中食後、われわれは一週間滞在した寒村（アメリカの標準で）ストックブリッジを別れることになつた。出發前になつてホテルの支配人がわたしの所へきて、「インディアンに使つていた石器で差上げられるのがないかと探したのですが、あいにくありません。あしからず。」と言つた。何のことかと思つたが、それは數日前、例のチョウト家などの出資で建つたこの町の博物館を見に行つたとき、インディアンの遺物を見ながら、こういうものがどこかで手に入らないかとその事務員に何氣なくきいたことを思ひだした。せまい田舎でそのことが言いふらされ、ホテルの人の耳に入つたのであらう。何という純朴さ。日本の山村にだけ求められると思つてはいけない。ストックブリッジ七日の一切の議論が忘れ去られてよいほど、中國思想史の研究が進歩する日があらうとも、この米國の田舎で

ふれた人情を自分は忘れることはないであらう。

（一九五八・八・二七）